

志向性と意識

——ブレンターノをめぐる覚書¹——

中畑正志
(京都大学)

I

1 同時代の流行が過去への眼差しを拘束するというのはきわめてありふれた現象である。フランツ・ブレンターノについてもそれは例外ではない。いや、むしろブレンターノの場合は現代哲学の動向の影響を受けやすい存在と言えるかもしれない。フッサールらの多くの弟子を教育し、現象学をはじめとしたドイツ・オーストリア圏の哲学の一つの重要な起点となる思想家。同時にラッセルやチザムを通じて英語圏の哲学にも重要な争点を提供した哲学者。また、フッサール、フレーゲ、マイノングらがそれぞれの仕方で応答しようとした課題の設定者²。多くの思想的展開の源泉となった思想家だから、現代からブレンターノへと遡る思考の線を引く、というより思考の線をたどることは比較的容易に思われるかもしれない。

2 そのように引かれた思考の線の一つが、「ブレンターノのテーゼ」だった。20世紀の後半に志向性の概念に注目が集まり、その自然化の可能性などをめぐって熱い議論が戦わされるなかで、フランツ・ブレンターノはまがりなりにも³志向性概念の

1. この論考は、2013年3月のフッサール研究会でのシンポジウム「志向性の哲学と現象学」において、私の『魂の変容——心的基礎概念の歴史的構成』（中畑 2011）の第V章「志向性——現代状況と歴史的背景」にもとづく報告の機会を与えられたことを機縁として成立した。提題のお誘いをいただくとともに司会を務めていただいた浜渦辰二氏、シンポジウムの共同報告者で私の論考についてもコメントしていただいた村田純一氏、特定質問者として興味深い意見を示してくださった富山豊氏、佐藤駿氏（佐藤氏には本稿の掲載の上で表現等についていくつかの修正の労も賜った）、そしてさまざまな角度からご意見をいただいた参加者の方々に深く感謝を申しあげる。また、この論文についても私の遅延にもかかわらず忍耐強く待ってくださった秋葉剛史氏にもお詫びと感謝を申しあげる。このような発表の機会がなければ、ブレンターノを再度読み直すこともなかったであろう。

2. これは Dummett 1993 の見立てである。

3. このように断りを入れるのは、実際にはブレンターノをまったく読まず議論する論者や誤った解説も少なくなかったからである（中畑 2011:117; 269 nn.(4)(5)）。残念ながらそうし

始祖ないしは提供者として重要視され、またそのことから志向性を非志向的なもの、あるいは自然的なものへと還元することはできないという主張に彼の名が冠されたのである。この志向性をめぐる現代の論争とブレンターノの志向的内在の概念、そしてその歴史的背景について、私も一つの探究を試みており、ブレンターノの志向的内在の概念とその背景にあるアリストテレスとデカルトという本来相反する思考との関係については、いくつかの局面で一定の理解を得ることができた（中畑 2001 第V章）。だが、もちろん、残された課題も多い。

3 その一つが意識と志向性との関係である。いま志向性の概念を考えると、この問題は避けては通れないだろう。というのも、心の自然化可能性をめぐる論争のなかで、意識（consciousness）を自然化することの困難が主張される一方で、志向性はその中心的な位置を意識の概念に譲ったようにみえるからである。その経緯はよく知られているが、極度に単純化して復習すれば次のようになる。意識概念へのさまざまな批判にかわって、志向性の概念は心的状態を物理的状态から区別する有力な指標と考えられてきた。つまり志向性と意識とは、いったんは分離され、志向性の本性の解明が心の哲学の中心問題である心の自然化をめぐる議論において雌雄を決する主戦場となる。しかしながら、志向性の自然化についてけっして決着を見たわけではないものの、自然化のための多くの理論やプログラムが提示されるなかで、たとえ志向性は何らかの形で自然化されたとしても依然として残る心的状態の特異性の存在が主張される。「現象的」「主観的」あるいは「質的」と特徴づけられる局面であり、それらはまた、「現象的意識」（phenomenal consciousness）あるいは端的に「意識」とも呼ばれる（以下、とくに断らないかぎり「意識」は現象的意識を指す）。このような意味での意識がハード・プロブレムとして浮上し、熱い議論が交わされるのに対して、志向性はイージー・プロブレムに分類される。もちろん、こうした扱い方には当然異論も提出され、意識と志向性との関係も再考されつつあると言えるだろう。

4 こうした心の動向に促されるように、ブレンターノの「心の哲学」をめぐる、近年ではブレンターノを意識についての重要な理論家として読み直すことが試みられている。

なるほど、そうした最近までの動向を念頭においてブレンターノの主著『経験的立場からの心理学』（PES: Brentano 1874/1955）をざっと見てみても、志向性（実際には「志向的内在」）よりも意識に関わる考察のほうがはるかに多くを占めていることがわかる。志向性を中心とした従来の読み方とは別の角度からもブレンターノを読むことができそうだ。

た風潮は終わったわけではない。その後の一例として Horowitz 2005 の consciousness の項には、新たなタイプの誤った解説が記載されている。

志向性という概念の源泉となった思考において、意識はどのように理解され、また志向性とどのような関係におかれていたのか。——以下で示すのは、歴史的にも理論的にも興味深いこの課題について、まず基本的に踏まえておくべき事柄を確認するための覚書である。

II

5 ただし、現代の意識をめぐる論争を念頭におきながら、それを布伦ターノの意識をめぐる議論と結びつけるためには、ある迂回が必要である。布伦ターノによる意識 (*Bewußtsein*) に関わる議論を (現象的) 意識をめぐる現代的な論争へと直接重ねることはできないからだ。

布伦ターノは、意識 (*Bewußtsein*) という語の多義性を検討したうえで、この語を心的現象 (*psychisches Phänomen*) や心的活動 (*psychischer Akt*) の同義語として、それらのかわりに使用することを告げ、事実、その後の議論はこの意識という語が主として使用されて展開されている。その理由として彼が挙げるのは、心的現象、心的活動などの語が複合語で回りくどいことともに、「「意識」という表現が、意識がその意識である対象を指示するので、対象の志向的内在の独自の特質に即して心的現象を特徴づけるのにふさわしい」ということであった (PES I. 142-143)。したがって心的現象が志向的であるとともに意識現象であることは、布伦ターノにとっていわば考察の前提である。

このような意味での意識であれば、現代の論者の多くは現象的意識ではなく、アクセス意識や志向性、あるいは表象として理解するであろうし、そのような扱いを布伦ターノも承認するであろう。彼にとっても、いま引用した言葉が示すように、意識ないし意識の対象であることは志向的内在の対象の特性の適正な代用表現であり、意識と志向的内在は別の特性を指示するものではない。さらに意識が遍く認められる心的現象は、表象 (*Vorstellung*) を基礎として成立している。

6 ブレンターノが『経験的立場からの心理学』で考察しようとした意識に関わる問題は次のようなものだった。——すべての心的は意識状態であるとしても、意識の対象とならない心的現象はあるのか。すなわち意識されない意識はあるのか、と。彼にとって問題だったのは心的現象を対象とするような意識である。布伦ターノはこのような意識を、「内的意識」あるいは「内的知覚」 (*innere Wahrnehmung*) と呼んでいる (布伦ターノは両者を同義的であるとしながら文脈に応じて使い分けている。以下では、布伦ターノと同じく「内的意識」を中心に使用しながら、「内的知覚」も適宜使用する)。

心的現象一般を考察する『経験的立場からの心理学』 (PES) の第2巻は、その第1章で志向的内在という心的現象の指標を提出しているが、その後の議論はむしろこ

の内的知覚や内的意識をめぐるものとなっており、とりわけ同巻第2章は「内的意識」の表題のもとで、上記の問の探究が遂行される。そして同章の末尾の節(13節)は、「意識されない心的活動は存在しない」(Es gibt keine unbewußte psychische Tätigkeit)と題され、この命題の証明に宛てられている。ブレンターノに従うなら、心的現象は、「意識される」という特性をもち、それによって物的現象と区別される。すると心的現象は、何かに関わるという志向的内在と何かの意識であるという特性とともに、それ自身が内的意識の対象であるという独自の特性を有するのである。

ブレンターノは、この二つの意識が同一の心的現象において成立すると考えた。

B1 音が表象されるその同じ心的現象において、われわれは同時にその心的現象それ自体を同時に認識する。そしてさらに、その現象がそれ自身の内に音を内容としてもつとともに、同時にそれ自身をもその内容として含むという点でその二重の特性にもとづいて認識するのである (PES I. 179–180)

一つの心的現象は、その志向的对象とともに、その心的現象自体をも認識するのだ。このような主張は「ブレンターノのテーゼ」ならぬ「ブレンターノの最も驚くべきテーゼ」(Kriegel 2013)とも呼ばれている。

7 意識に関する現代の哲学的分析とブレンターノの意識の理論とを媒介するのは、以上のような内的知覚／内的意識の理論である。というのも、現代では、意識——とりわけ問題となっている現象的意識——の本性を心的状態のある種の表象 (representation) ないし認知 (cognition) であると考えようとする諸理論が存在するからだ。このような理論によれば、ある心的状態が意識状態であるとは、その心的状態が(非推論的な仕方)で表象されていることである。

こうした現代的な諸理論は、全体としてみれば、心的活動の自然化の試みの一つである。もしもハード・プロブレムとされた現象的意識を非現象的なタームである表象の一つとして理解することができれば、それを他の表象と同じように自然化することへと展望が開けるだろう。ただしこのような見通しを共有しても、実際のルートはさまざまに構想されている(以下その種の試みを瞥見するが、きわめて便宜的で一面的な解説とならざるをえないし、文献の指示も最小限にとどめている。整理された解説やアンソロジーも多く⁴、そのなかで各理論の提唱者も紹介されているので適宜参照されたい)。

意識を(第1階の)表象内容のある種の特質(たとえばアナログ的(非概念的)な内容を伴った状態)であると理解するのが、意識の表象理論 (representational theory of consciousness) である (Dretske 1995; Tye 1995)。このような理論はいくつかの困

4. 意識の高階の理論については Gennaro 2004; Carruthers. 2011 を、自己表象理論については Kriegel 2006 を参照。

難を指摘されているが、そのうちの一つは、意識それ自身がある種の表象ないしその一部であるなら、意識的な表象と非意識的な表象との区別を説明することがむずかしいというものだった。これに対して、意識がある種の表象であっても、第1階の表象とは異なる高階の認知や表象や認知だとすれば、高階の表象を伴うか否かによって、表象に意識的なものと非意識的なものという区別を認め説明することが可能となる。そのような理論が、意識とは、自分の心的活動についてそれをいわばモニターする高階の表象や認知であるという、意識の高階の理論 (higher-order theories of consciousness) である。意識的な表象と非意識的な表象の区別は、第1階の表象状態についての高階の表象の有無によって説明される。

この種の理論は、さらに、その高階の表象ないし認知が (i) 思考 (thought) であるとする理論 (higher-order thought (HOT) theory) (Rosenthal 1986, 1993, 2005) と (ii) 知覚 (perception) ないし知覚に類した認知であるとする理論 (higher-order perception (HOP) theory) (Armstrong 1968, 1984; Lycan 1996) に区別される。いずれの理論においても、高階の認知と当の第1階の心的状態は互いに独立である。そのことによって、高階の認知を伴わずとも当の心的状態自体は成立すること (無意識の心的状態) が認められうる。

しかしこのことはこの種の理論にある困難をも引き起こす、高階の表象は表象であるかぎり、誤ること (misrepresentation) がありうる。したがって、対象とする心的状態が存在しなくても、高階の表象は成立しうるだろう。だが、現象的意識にある種の特権的性格を認める人々の一部は、自己の心的状態を誤って表象するという可能性そのものを疑うであろう。かりに誤表象の可能性を認めたとしても、たとえば特定の色を見ているという第1階の経験が存在しない場合に、それを誤って存在するかのように表象する高階の表象はどのような経験をもたらすのか。かりに現象的な赤さの意識をもたらすなら、高階の表象はその意識を第1階の経験から引き出してはいないことになる。

8 こうした困難を避ける一つの方策は、ターゲットとなる (第1階の) 心的状態とそれの (高階の) 表象との間に、独立ではなく、より内的な、あるいは構成的な関係を認めることである。この構成的な関係の代表は同一性であろう。たとえばある同一の知覚状態は外的な対象 (赤い林檎) を表象するとともに、その表象自身をわれわれに表象するというように。この場合ある心的状態 (表象) が意識状態であるのは、その表象自身が自らを特定の仕方でもって表象することにもとづくと考えられる。このように何かの表象がそれ自身をも表象するのであるとすれば、上記のような対象を欠いた高階の表象の問題は解消されるだろう。こうした意識の理論は、先の高階の理論に対して、意識の同階の理論 (same order theory of consciousness) あるいは自己表象理論 (self-representational theory) と呼ばれる (Smith 1986, 1989; Kriegel 2003, 2004, 2006) 。

ただし、自己の表象であっても表象の表象であるという高階性をもつため、それが同一の心的状態であるとしても高階の理論の一種（自己表象的高階の理論 self-representational higher-order Theory）と分類することもできるし、そうすべきだと主張されることもある（Carruthers 2011）。そしてこれは単なる分類の問題ではない。この自己表象的な意識理論は、どのような意味で高階の理論と異なった理論として構想されているのか、というこの理論の中心的論点に関わるからだ。問われるのは、第一階の心的状態とその心的状態の表象との関係である。高階の理論はそれが相互に独立であると考えたが、自己表象的理論は、より緊密で内的な関係を想定する。しかしさらにその関係を明確化し、理論的に経験的にも立証しなければならないだろう。

9 すでに確認したように（6 節）、ブレンターノの内的知覚ないし内的意識の理論は心的状態が意識されていることを説明するものであり、以上の現代の理論のように、（現象的な）意識状態にあることを説明する理論であるとは言えない。しかし自己の心的状態の認知という主題を共有しており、また現代の諸理論が比較的明瞭に定式化されているだけに、ブレンターノの「心の哲学」を解明のための一つの手がかりを与えている。事実近年、現代的な分析を踏まえた上での内的意識をめぐる議論はきわめて活発である。ブレンターノと現代の諸理論との間には、すでに数多くの思考の線が想定され、錯綜しつつある。

以下での考察は、しかし、そうした論争に直接立ち入ることはしない。むしろブレンターノの内的意識の理論について、むしろその過去からそこへと引かれている思考の線を確認したい。より広い歴史的視点から俯瞰的に見ることによって、ブレンターノの研究がより詳細となり、現代の諸理論との関係づけも多様化するなかでかえって見失われがちな事情を、あらためて確認できるように思われるからである。

III

10 ブレンターノは、『経験的立場からの心理学』のなかで、内的知覚／内的意識に対してつぎのような位置づけを与えている。

(1) 内的知覚は「心理学的探究にとって不可欠の経験であり主要な源泉」であり、ブレンターノの構想する「経験的立場からの心理学」の経験的な基礎である。これを欠いては思考や判断、快苦がそれぞれ何であるのかを探究することはできない。

(2) この「内的知覚」と「内的観察」（innere Beobachtung）とは明確に区別されねばならない。内的知覚の対象である自己の心的活動を外的対象と同じように観察することはできない。たとえば人が自分自身の怒りを観察しようとするなら、すでにその怒りは失われてしまう。「われわれが内的知覚の対象に注意を集中することが不可能であるのは、普遍的に妥当する心理学的法則」（PES I 41）なのである。ブレン

ターノに従うなら、この区別を曖昧にすることが、一方では内的観察にもとづくこととされる心理学を恣意的なものとし、他方ではそれを内的知覚と区別しないために学問としての心理学の成立可能性に対する疑念を生んできたのだ⁵。

したがって内的観察とは区別される内的知覚／内的意識は、自己の心的現象について注視したり反省したりするような認識ではなく、近年の議論でしばしば使用されるタームを使えば、前反省的な気づき（pre-reflective awareness）である。

(3) 対象（物的現象）の知覚と内的知覚は、同時ではあるが、しかし同等ではない。先の引用にすでに示されていたように、物的現象が第一次の対象であるのに対して、心理現象それ自体は第二次の対象である。あるいはそれに付帯して（nebenbei）知覚される。

11 先に見た現代の諸理論とこのような内的意識の理論は、どのように関係するのか。最初に高階の理論を唱える論者の一人である Rosenthal の議論を取りあげよう。Rosenthal は、意識を高階の認知であるとする理論の最も初期の提唱者の一人であり、なかでも高階の思考理論（HOT）を主導的に展開してきたが、同時にこうした視点からブレンターノの内的意識の概念にも早くから注目していた。その後諸解釈が輻輳する以前に提出された彼の解釈は、その分だけ論点が明快である。Rosenthal によれば、たとえば特定の音の知覚とそれについての高階の思考はおおよそ同時に起こるが、ブレンターノのように音の知覚がその知覚の内的意識を必ず伴うと考えることは誤りである。Rosenthal は、ブレンターノのこのような理解をデカルト主義やロックらの意識の概念の影響下にあったためであると考え⁶、これを批判する。

Rosenthal のような高階の（思考）理論の提唱者からすれば、これは当然の批判である。だが、心的活動とその内的意識とがそのような独立の関係にあるかどうかは、高階の理論とそれを批判する自己表象的理論との争点でもあるのだ。

12 Rosenthal の批判的言及に対しては、最初に、ブレンターノのために、彼が心的活動とその内的知覚との間に一体的関係を認めるのは、彼がロックらの考え方を無批判にないしは無自覚に受け入れているからではないことを指摘すべきだろう。すでに触れたように、『経験的立場からの心理学』第2巻第2章でブレンターノは意識されざる意識は可能か、という問題を設定して探究を展開した。その探究のはじめに、ロックは J. S. ミルらとともに「意識されざる意識」（unbewußtes Bewußtsein）という概念自体が直接的に矛盾を含むといった批判者として言及されているが、しかしブレンターノは自身の問題設定がそうした語議上の矛盾を含むものではない

5. Brandl 2013 は、意識についての現代の諸理論（たとえば高階の思考理論）からの批判を回避するために、この内的知覚と内的観察との境界をより緩やかなものと解釈する。しかしそれはブレンターノの心理学の基礎を掘り崩すことになり、受け入れられない。

6. Rosenthal 1985: 35 n.13; 1986: 65–67.このような見解としてロックの “thinking consists in being conscious that one thinks.” (*An Essay Concerning Human Understanding*, II, i, 19) などの言葉が参照されている。

(ブレンターノの「無意識」の用法によれば語義上の矛盾は生じない) 旨を断っている。その上で、彼が最終的には否定する「意識されざる意識」の存在を認める論者として、トマス・アクィナス、ライプニッツ、カントといった有力な哲学者から、ハミルトンをはじめとした同時代の哲学者、さらにはヴェント、ヘルムホルツら有力な心理学者らを挙げている。とりわけヘルバルト (Johann Friedrich Herbart 1776–1841) に対しては、意識されない心的現象を認めるヘルバルトの論拠や証拠を確認したうえで、それに対して詳しい批判を展開している。ブレンターノは強力な論敵たちを相手に、自らの考察にもとづいて心的状態とその内的意識／内的知覚との関係を確立しようとしたのだ。ブレンターノの講義の聴講者の一人であった精神分析の創始者による「無意識の発見」が、(思弁的なヘルバルトの無意識の理論の継承というよりも) むしろこのようなブレンターノの批判に応えうるように構想されているという指摘⁷⁾は、その意味で興味深い。

13 第二に、ブレンターノが哲学史上で自らの援軍として認めているのは、そうした近代の思想家ではなく、ここでもアリストテレスである。アリストテレスの『魂について』第3巻第2章の次のような議論がそれである。

A1 ところで、われわれは、われわれが見ているということや聞いているということを感じるのであるから、見ていることを感じるのは (i) 視覚によるか、それとも (ii) 異なる感覚によるのかのどちらかであることが必然である。だが [(ii) の場合には]⁸⁾同一の感覚が視覚と基に措定された色とをともに感覚することになり、その結果、同一の感覚対象について二つの感覚が存在することになるか、あるいは [(i) の場合には] 視覚は自己自身を感じることになるだろう。しかしさらに、かりに [(ii) のように] 視覚を対象とする感覚が実際に視覚とは異なる感覚であるとする、無限背進に陥るか、さもなければその感覚の系列のうち特定の感覚が自己自身を感じることになるだろう。したがってわれわれは [(i) のように] この自己自身の感覚をその最初の感覚 [すなわち視覚] に帰さなければならない。(『魂について』第三巻第二章 425b12–20)

このテキストとそれに続く議論は、そもそもアリストテレスが説明しようとしている当の現象が何なのかをめぐって見解が分かれているほど、現在ではさまざまな解釈が提出されている。しかし、アリストテレスがこの箇所、自分が見ていることを感覚知覚するというはたらきないし活動を、(i) 視覚それ自身 (ii) それ以外の感

7. Cohen 2000. フロイトによるブレンターノの講義の聴講ぶりについては、Merlan 1945, 1949 を参照。

8. 私は Osborne 1983 らに従って、「同一の感覚が視覚と基に措定された色とをともに感覚すること」は (i) (ii) のいずれの選択肢にも適用されると考える (したがって中畑 2014 ではそのように補って訳している) が、ブレンターノはおそらく (i) に関わる問題の指摘と解釈しているので、ここではそのように補った。

覚という選択肢のうちで (i) の視覚それ自身に帰していることは明らかである。A1 に続く議論においてアリストテレスは(i)にまつわる諸問題を検討してはいるものの、この選択を撤回してはいない。

ブレンターノも『経験的立場からの心理学』ではそのように解釈している。この点で彼はこの書に先行するアリストテレスの『魂について』の研究書『アリストテレスの心理学』(Brentano 1867) から解釈を変更したのだ。志向的内在の概念の場合には、提示されたのは『経験的立場からの心理学』が初めてであったが、『アリストテレスの心理学』ですでにその概念の内容は先取りされていた(中畑 2011: 193–201)。しかし、内的知覚については事情が異なる。『アリストテレスの心理学』では、ブレンターノの解釈は——トマスをはじめとした「解釈者の大多数に従って」(PES SS.185–6 n.**)——、自分が見ていることを感覚するのは視覚ではなく特別な内的感覚(能力)であることをアリストテレスが主張している、というものだった。たしかに「見ていることを感覚する」はたつきは、古代後期以後、五感と異なる内的感覚に帰され、そしてこの内的感覚には共通感覚や想像力などの機能も帰せられて、徐々に肥大化し、認識論と心の哲学のうえできわめて大きな役割を果たすことになる⁹。そうした見解の影響は、アリストテレスのこの箇所解釈にも及んでいる。しかし『経験的立場からの心理学』では、その種の解釈が批判のターゲットとなっている。ブレンターノはこの書でアリストテレス自身の議論に忠実に読解し直し、「見ていることを感覚する」のが当の感覚と異なる高階の認知能力であるとする解釈を拒否したのである。

14 さらにブレンターノは、アリストテレスの議論に、自らの内的意識の理解に向けられた無限背進の脅威からの出口を見出している。すべての心的現象が意識されるという見解は、それに従うと、第1階の心的活動を意識する第2階の意識活動も、心的活動であるかぎり、意識される。第2階の意識活動を意識する第3階の意識活動も、心的活動であるかぎり、意識される。さらに・・・、というように無限背進に陥る、という批判を招く。この無限背進を避けるために、従来は「意識されざる心的活動」が想定されてきたし、そのことをブレンターノは了解している。しかし彼は、アリストテレスが意識されざる心的活動を措定せずにこの種の無限背進の問題を克服する途を示していると考え。それは一つの心的現象が同時にそれ自身の意識でもあるという理解である。一つの心的現象が第1階の志向的対象の意識(以下「対象意識」とも呼ぶ)であるとともに、対象意識の意識(内的意識)でもある。対象意識が意識されるために独立の高階の心的現象の措定を必要としないのだ。

ブレンターノは、『魂について』でのアリストテレスの論証は必ずしも的確でない問題点を指摘しているが、『形而上学』A 卷 9 章 1074b に依拠して、一つの心的活動はその志向的対象を第一次の対象とするが、それ自身を第二次の対象とする

9. この経緯の一部は、中畑 2013 においてたどられている。

という考えがアリストテレスの考えの精確な表現であると考え。そしてこれが、ブレンターノ自身の内的意識の理解でもある。

B2 音の表象と音の表象の表象とは単一の心的現象である。一方は物的現象であり他方は心的現象という二つの異なる対象との関係によってそれを考えることによつてのみ、われわれがそれらを概念的に二つの表象に分割するのである (PES I 179)。

ある心的活動を意識する内的意識は、意識される当の心的活動のうちに一体的に組み込まれている。だから、その心的活動に対してそれから独立にそれを意識する活動や状態の存在を必要としない。存在するのは第一次的な対象と第二次的な対象をともに参照する単一の心的活動である。——ブレンターノの主張は（好意的にまとめるなら）このようにまとめられるだろう。こうした理解は、外的な意識と内的な意識を単一の心的活動の内に認めるので、すでに見た現代の意識の理論に照らして考えるなら、Rosenthal 的な高階の理論ではなく同階の理論あるいは自己表象的理論に近似していることは明らかである。

15 だがこの理論的類似それ自体は、ブレンターノの理論を支持するというよりも、考察すべき問題の在処を指し示しているにすぎないだろう。すなわち、一つの心的活動において対象意識と内的意識がどのような「一体的」関係にあるのか、という問題である。ブレンターノは、その一体性を強調し、両者の関係を融合 (*verschmolzen, Verschmelzung*) という言葉でしばしば表現している¹⁰。にもかかわらず、この肝心な点についてブレンターノの説明は必ずしも明確とは言えず、むしろ偽装された高階の理論ではないかという疑いさえ向けられている¹¹（そうした批判は現代の自己表象的理論にもまた向けられるだろう）。

この点での曖昧さの原因は、しかし、ブレンターノの表現が十分に明晰ではなかったとか、あるいは考察がまだ十分に展開されていなかったというよりも、もう少し根深いところにあるように思われる。つまりブレンターノの内的意識の構想そのものに問題があったのではないか。以下ではそうした点を、歴史的な観点から、内的知覚／内的意識にかかわる二つの対照的な思考を参照することによって示唆したいと思う。

IV

10. PES I. 185 n.2; 204; II 112。あるいは第1階の表象の対象が内的意識にどのように現れるのかを論じて、ブレンターノは「独特の織り込み」 (*eigentümliche Verwebung*) という表現を使用している。

11. Thomasson 2000; Zahavi 2004, 2006.

16 すでに触れたように、ブレンターノは、第1階の表象と内的意識との一体性を認める論者としてアリストテレスを参照していた。彼が依拠した『魂について』の箇所（本稿13節のA1）でアリストテレスが問題としているのは、「見ていることを感覚する」こと、つまり外的対象を認知すること（赤い色を見ること）と自分が見ていることを認知すること（見ていることを見る、ないし感覚すること）である。アリストテレスの記述では、多くの解釈者たちが（意識的ないし無意識的に）その語彙を持ち込んでいかしゃくしているにもかかわらず、意識という概念に相当するような言葉は使用されていないし、そのことはある意味で決定的に重要である。しかしそれでも、アリストテレスにおける外的対象の感覚と感覚活動の感覚という二つの認知の関係は、ブレンターノにおける対象意識と内的意識との関係と並行しているので、ブレンターノがそうしたように、二つの認知が同一の感覚に帰されているこの議論を参照することは、両者の関係を考える上で確かに有益である。

アリストテレスがA1で主張しているのは、われわれある特定の色を見るとき、その視覚活動によって（自分が）見ていることも感覚知覚しているということだ。これに同じく「見ていることを感覚する」ことを論じた『睡眠と覚醒について』第二章の議論を照らし合わせるなら、そのあり方はより具体的になる。

A2 それぞれの感覚については、一方である固有なものが、他方である共通なものが属する。固有なものとは、たとえば、視覚にとって見るということ、聴覚にとって聞くということであり、またその他の諸感覚のそれぞれにとっても同じ仕方で成立する。(i) これに対して、すべての感覚に付きしたがうある共通の能力が存在する。(ii) この能力によってまた（自分が）見ているということや聞いていることをも感覚するのである。(iii) なぜなら、(a) 見ていることを見るのは視覚によるのではなく、(b) また、甘いものが白いものとは異なるということを現に識別しかつ識別が可能であるのは、味覚によるのでも視覚によるのでもなく、またその両方によるのでもなく、(iv) すべての感覚器官に属するある共通の部分によってであるから。（『睡眠と覚醒について』第二章 455a1-20）

簡単な議論だが、当面する議論との関係でこの箇所が告げるのは次のようなことである¹²。たとえば、目の前の砂糖に人は白い色を見て甘さを味わう。このような場合に、感覚されている白さと甘さが互いに異なることの識別は、アリストテレスは「共通の能力」によると指摘し、さらにこのような感覚のあり方が、問題となる「見ていることの感覚」も共通の能力に帰属することの根拠になると考えている (iii)。甘さと白さというモダリティーの相違を識別する能力が感覚していることを感覚す

12. 「見ていることを感覚する」はたらしきないし活動が、A1では視覚に帰されていたが、A2では「共通の部分」に帰されているという点を含めて、以上のアリストテレスの議論についてのより詳しい分析は中畑 2013；2015を参照。

る能力を説明するのは、この二つの種類の感覚能力の間にアリストテレスが次のような関係を見ていたからだろう。すなわち、この白さと甘さの相違の識別は、一方が見られたものである、他方が味わわれたものである、というその感覚のモダリティーの認知を伴っている。言い換えると、白さの認知は、見られている色の認知であり、したがってその色を見ているという認知を含意する。アリストテレスにとって色とは「見られうるもの」つまり見られるという能力（デュナミス）や本性（ピュシス）を備えたものである（『魂について』第二巻第七章 418a32–b2）。さらに、特定の色が現に認識されているとき、「見られうるもの」としての能力は「見られている」というかたちで実現（エネルゲイア）しているのであり、それは「見ている」という活動の実現（エネルゲイア）と切り離せない（同書第三巻第二章 425b25以下）。したがって特定の色を見て認知することは、「見られているもの」としての認知および「見ている」という認知を少なくとも潜在的に含んでいるのである。

「感覚していることの感覚」は、このようなかたちで、外在する対象の感覚的認知において、そしてその外在する対象に関わるかたちで、成立する。第一階の対象（特定の色）の認知が、当の対象の情報とともにその対象と認知主体との関わり方を示す情報を提供しており、その認知を含んでいる。まだ理論的には素朴だが、この洞察は重要だろう。以上の意味において、「感覚していることの感覚」も、外なる世界の事象の認識と別個に成立するわけではなく、むしろその外的事象に定位して一体的に成立しているのだ。

17 ブレンターノはこのようなアリストテレスの思考をどのように理解し、どれほどそれに関与しているのだろうか。このことを計測するためには、同じく「見ていることを感覚する」と記述されるような事象を論じながら、アリストテレスとはまったく異なる方向に展開された考察を参照するのがよいだろう。ブレンターノの内的意識／内的知覚の概念は、やはりこちらの影響下にもあるからだ。

まず影響関係を見届けるために、ブレンターノの内的意識／内的知覚の特性をブレンターノの記述にしたがって確かめておこう。ブレンターノは、繰り返し引用される「志向的内在」へ言及する議論（第2巻1章5節）のすぐ後の節ですでに、「すべての心的現象が共通して有するもう一つの特性」として、内的意識あるいは内的知覚によってのみ知覚されることを挙げている（PES I 128）。物的現象は外的な知覚でしか認識されないからだ。言い換えれば、内的意識は (i) すべての心的現象を内的に知覚する。さらにブレンターノは、内的意識だけがもつ特質として、(ii) 直接性、(iii) 不可謬性を挙げ、そしてこのような特質をもつ内的知覚こそ、(iv) 言葉の厳密な意味で「知覚」（Wahrnehmung）と呼ばれる、と主張する（PES I 129）。こうした内的意識の特性は、次の章で「意識されざる意識」の不可能性の論証においても堅持され、論証の前提として使用されている（PES I 169; 177–178 n.）

18 ブレントアーノは明確に表明してはいないが、このような内的知覚の特質をそのまま保持する歴史的な先行者が存在する。デカルトの「意識」(conscientia)である。

D1 私は思考 (cogitatio) という言葉で、われわれによって (a) 意識されて (consciis)、われわれの内に生ずる、しかもその意識 (conscientia) がわれわれのうちにあるかぎりのすべてのもの、と理解する。したがって、理解すること (intelligere)、意志すること、想像することだけでなく、感覚することもまたここでは考えることと同じである。たとえば、もし私が、私は見る、あるいは私は歩く、ゆえに私はあると言い、そして、これを身体によってなされる視覚活動や歩行活動と理解するのであれば、この結論は絶対的に確実であるとは言えない。なぜなら、睡眠中によくあるように、私は眼を開かず、場所を動かなくとも、また、たとえ私が身体をもっていないとしても、私が見たり歩いたりしていると思うことはありうるからである。しかし、もし私がこれを見たり歩いたりすることの感覚、すなわちそのようなことの意識 (conscientia) と理解するのであれば、その場合、これは精神にかかわり、しかも精神のみが、自分が見ているとか歩いていると感覚する、すなわち、そのように考えるのであるから、上述の結論は (b) まったく確実である¹³ (『哲学原理』 I.9 AT VIII A 7-8)

D2 思考という名称でもって私は、直接にわれわれがそれを意識している (consciis) というふうにしてわれわれのうちにあるところのものすべて、を包括する。それであるから、意志の、知性の、想像の、および感覚の作用のすべては思考なのである。しかしながら、私は (c) 直接にという語を、思考から生起するものを排除するために、付け加えたのであって、たとえば有意運動はなるほど思考を原理としてもってはいるが、それそのものはしかし思考ではないのである。(『第二答弁』 AT VII 160)

D3 最後に、この私は、感覚するところの、言うならあたかも感覚を介してであるかのごとくにして物的な事物に気がつくところの私と同じ私であり、実は今しも、光が私には見え、騒音が私には聞こえ、熱を私は感じているのである。それらは偽である、というのは、私は眠っている [と私に言う者もあろう] から。だが、確かに、私には、見えると思われ (videre videor)、聞こえると思われ、暖かいと思われる。このことは (b)* 偽ではあり得ず、このことが、(d) 本来は (proprie) 私において感覚すると称されていることなのであり、実際、このような厳密な (praecise) 意味に解するなら、感覚する (sentire) ということは思考するということにほかならないのである。(『第二省察』 AT VII 29)

13. デカルトの邦訳は白水社版『デカルト著作集』(三宅ほか 2001)におおよそ従っている。

D1 (および D3) において、デカルトも「見ていることを感覚する」と記述されるような事象に注目している。そして、外的対象の感覚ではなくそのような仕方での「感覚」ならば「思考」(cogitatio)に含めうるとした上で、そうした「思考」とそれを支える「意識」(conscientia)に確実性と不可謬性を認めるのである。デカルトの思考ないし意識とブレントアーノの内的意識との共通性はあきらかだろう。前節で挙げたブレントアーノの内的意識の特性(i)-(iv)との対応を示すなら、下線部が示すように、デカルトにとって意識とはわれわれの内に生ずるものであり、思考(cogitatio)である理解、意志、想像、感覚などはその意識を含んでいる ((a)→(i))。それは絶対に確実で不可謬あり ((b)(b)*→(iii))、直接的である ((c)→(ii))。そして感覚知覚の場合、たとえば「見ているように見える」と表現されるようなかたちでの使用が感覚するという語の本来の意味における本来の(proprie) 厳密な(praeclise¹⁴) 使用なのだ ((d)→(iv))。このかぎりでは、ブレントアーノの内的知覚/内的意識は、デカルトの意識概念の特質を逐一そのまま継承している。この点は近年のブレントアーノの内的意識の理論をめぐる議論のなかでかえって触れられることが少ないので、あらためて強調するに値する。

ただしデカルトは「思考」「意識」に対して確実性と不可謬性を付与するために、大きな代償を払っている。それらの特性は、徹底した懐疑をくぐり抜けるために、外的世界のあり方を参照するという——偽の可能性をつねに孕む——性格を、心的事象から奪うことによって確保されたからだ。デカルトにおいては、「見ていることを感覚する」という事態は、第1階の感覚知覚から身体性および外的世界とのかわりを捨象し、内的な世界(主観性の領域)へと向かうステップとなったのである。

同一の記述が与えられる事態をめぐって、デカルトとアリストテレスの思考のベクトルは、ほぼ逆の方向へと向かっている。すでに見たように、アリストテレスは「見ていることを感覚する」という事態のうちに、外的世界に定位するかたちで、対象の感覚知覚とその感覚知覚活動の知覚との一体性を主張したからである。

19 以上の事情を踏まえて、ブレントアーノに戻ろう。

一方でブレントアーノの内的意識/内的知覚の概念は、直接性や不可謬性といったデカルト的意識の特性を継承していた。そしてこうした内的意識の特性の調達先も、デカルトにあると判断せざるをえない。そうであるとすれば、内的意識もまた、世界との関係を遮断して得られるデカルト的意識なのだ。

このデカルト的視点からその思考の線上にあるブレントアーノの内的意識を望み見るなら、ブレントアーノによる内的意識と対象意識との一体性の主張は、倒錯した主張に見えるであろう。一方で内的意識は不可謬性をはじめとした、(第1階の)対

14. なお、私の論旨には直接関係しないが、この語のより精確な意味については所 1996 の詳細な考察がある。

象意識には成立しえない諸特性をそなえていた。しかしこの独自性は、デカルトが心的状態から外的世界への参照をいったんは遮断することによって得られたものだった。ブレンターノの内的意識もこのデカルト的意識の特性を継承することを通じてこの遮断の正当性を認めていると言わねばならない。それはもっぱら心的現象のみに関わるがゆえにそのような性格を備えた意識なのだ。だから、ブレンターノが内的意識と対象意識との一体性を主張するというのは、思考に含まれる本来の意味での感覚と身体を伴う外的事象の感覚という、デカルトが懸命に区別した二つの感覚の一体性を主張することになる。するとその主張は、デカルトが精神（思考するもの）と物体との一体性を主張することに比せられるだろう。しかしブレンターノには、その二つをつなぐどんな松果腺があるというのだろう。

他方、アリストテレスからブレンターノへと延びる思考の線を重視するなら、ブレンターノは対象意識と内的意識の一体性を強く主張することになるだろう。しかしこの場合には、内的意識の構想自体が危うくなるのではないか。なぜならアリストテレス的視点から展望するなら、デカルトの意識とはもともと外的世界にかかわる認知において一体であったものの一部を、徹底した懐疑への応答というある哲学的意図のもので引き離すことによって生まれた思考の産物と考えられるからである。だから、ブレンターノの内的意識も、実際に対象意識と一体的であるならば、その特権的な諸特性を保持しえないであろう。

20 こうした思弁的考察は、まだ覚書の域を出るものではない。しかし少なくともこれまで見てきた事情は、ブレンターノの内的意識の概念が、かなり根深い問題を孕んでいることを強く示唆している。内的意識のデカルト的特質の承認とアリストテレス的な対象意識との一体性という主張は、折り合うことが困難なのだ。

また以上の考察は、ブレンターノの内的意識が、実は偽装された高階の認識であり、同一の心的事象のなかで十分に「融合」していないといった批判¹⁵を支持するかもしれない。また他方で、ブレンターノとアリストテレスがともに自己表象的な意識の理論を主張していたとする詳細な論証¹⁶に対して、たしかに一見したところ類似関係は認められるが、しかしより根本的な前提の相違を指摘することになるであろう。

もちろん、現在さまざまなかたちで遂行されているブレンターノの意識の理論の整合的解釈の試みや、現代的な諸理論との関係づけによる再評価は重要な仕事である。しかし、それを遂行する上でも、以上の歴史的考察が示す基本的な事情をよく踏まえて事に取りかかからねば、考察は上滑りしたものとなるのではないか。

もしかすると、意識（現象的意識）という「困難な課題」をめぐるでも、同様のことがある程度まで言いうるのではないかと私は密かに思っている。

15. 註(11)に挙げられた文献などを参照。

16. Caston 2002.

文献表

- Armstrong, David. 1968. *A materialist theory of the mind*. London: Routledge.
- . 1984. "Consciousness and causality," in *Consciousness and Causality*, ed. D. Armstrong and N. Malcolm, Oxford: Blackwell.
- Brandl, J. 2013. "What is pre-reflective self-awareness? Brentano's theory of inner consciousness revisited," in D. Fisette and G. Fréchette, pp.41–65.
- Brentano, F. 1867. *Die Psychologie des Aristoteles, in besondere seine Lehre von NOUS POIETIKOS*. Mainz: Franz Kircheim.
- . 1874/1955. *Psychologie vom empirischen Standpunkt*, hrsg. O. Kraus, Leipzig: Duncker and Humblot, repr. Hamburg: Meiner 1955.
- Carruthers, P. 2011. "Higher-order theories of consciousness," *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, URL <<http://plato.stanford.edu/archives/fall2011/entries/consciousness-higher/>>.
- Caston, Victor. 2002. "Aristotle on consciousness." *Mind* 111: 751–815.
- Cohen, Aviva. 2000. "The origins of Freud's theory of the unconscious: A philosophical link." *Psychoanalytische Perspectieven* 41/42: 109–112.
- Dretske, F. I. 1995. *Naturalizing the mind*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Dummett, Michael. 1993. *Origins of analytical philosophy*. London: Duckworth.
- Fisette, D. and G. Fréchette, eds. 2013. *Themes from Brentano*. Amsterdam: Rodopi.
- Gennaro, R., ed. 2004. *Higher-order theories of consciousness : an anthology*. Amsterdam; Philadelphia, PA: John Benjamins Pub.
- Horowitz, M. C., ed. 2005. *New dictionary of the history of ideas*. Detroit, Farmington Hills, Mich: Charles Scribner; Thomson Gale.
- Kriegel, U. 2003. "Consciousness as intransitive self-consciousness: two views and an argument." *Canadian Journal of Philosophy* 33:103–132.
- . 2004. "Consciousness and self-consciousness." *Monist*: 182-205.
- . 2013. "Brentano's most striking thesis: No representation without self-representation," in D. Fisette and G. Fréchette, pp. 23–40.
- Kriegel, U. and K. Williford, eds. 2006. *Self-representational approaches to consciousness*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Lycan, W. 1996. *Consciousness and experience*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Merlan, P. 1945. "Brentano and Freud," *Journal of the History of Ideas* 6: 375–377.
- . 1949. "Brentano and Freud – a sequel," *Journal of the History of Ideas* 10: 451
- Osborne, C. 1983. "Aristotle's *De anima* 3.2: how do we perceive that we see and hear?" *Classical Quarterly* 33: 401–411.
- Rosenthal, D. 1986. "Two concepts of consciousness." *Philosophical Studies* 49: 329–359.
- . 1993. "Thinking that one thinks," in *Consciousness: psychological and philosophical Essays*, ed. M. Davies and G. Humphreys, Oxford: Basil Blackwell, pp. 197–223.
- . 2005. *Consciousness and mind*. Oxford: Clarendon Press: Oxford University Press.
- Thomasson, A. 2000. "After Brentano: a one - level theory of consciousness." *European Journal of Philosophy* 8: 190–209.
- Tye, M. 1995. *Ten problems of consciousness: a representational theory of the phenomenal mind, Representation and mind*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Smith, D. W. 1986. "The structure of (self-) consciousness." *Topoi* 5: 149–156.
- Zahavi, Dan. 2004. "Back to Brentano?" *Journal of Consciousness Studies* 11: 66–87.
- . 2006. "Two takes on a one-level account of consciousness." *Psyche* 12: 1–9.

- 所 雄章, 1996. 「『省察』的用語の一考察——「*praecise*」について」デカルト研究会編『現代デカルト論集 III 日本篇』勁草書房、13–37.
- 中畑 正志. 2011. 『魂の変容：心的基礎概念の歴史的構成』岩波書店.
- . 2013. 「見ていることを感覚する：共通の感覚、内的感覚、そして意識」『哲学』64: 78–102.
- . 2015. “Aristotle and Descartes on Perceiving that We See.” *The Journal of Greco–Roman Studies* 54: 99–107.
- 他（訳）. 2014. 『アリストテレス 魂について；自然学小論集』アリストテレス全集第7巻、岩波書店.